ベップ・アート・マンス 2010 参加企画
「混浴“学生”世界～学生による、学生のためのフォーラム～」

4 日目「グローバリゼーションとアート」フロア議論

2010 年 11 月 6 日（土）　於 platform01（別府市元町 8-3）

司会
伊藤 麻未（立命館大学国際関係学部 4 年生[1]）

発表者
aki（神戸大学大学院国際文化学研究科 聴講生）
「アーティストが見たグローバリゼーション―龍神村と別府を事例として」
陳 怡如（神戸大学大学院国際文化学研究科 博士前期課程）
「台湾の人形劇と地域活動」
富澤 美緒（神戸大学国際文化学部 4 年生）
「『国民文化』の『枠組み』を越えた国際交流事業へ
―ジャパンウィーク、KABAWIL の事例を中心に」

伊藤：今からディスカッションを始めたいと思います。先ほど富澤さんからお願いがあったこともあるのですが、国際交流っていうものが可能か、という漠然とした疑問が私も実はすごく気になっています。先ほども自己紹介をさせていただいたように、クレオール主義というものにちょっと興味がありまして、エドゥアール・グリッサンというマルチニック諸島の作家が…

aki：マルチニック諸島、どこにあるんですか？

ナショナリズムとアイデンティティの問題

伊藤：カリブ海の細々とした島の人らしいのですが、そこらへんは黒人だとか中国人の労働者とか中東など色んな出身の人が混じりあっているところで、色んなアイデンティティを持っている人がいまして。その中で自分のアイデンティティって何だろうという風に彼は模索していったんですけども、彼は、西洋っていう、なんていうかあるひとつのアイデンティティを求める動きに対抗心を抱いていて、それよりも混ざった文化のほうが強いんではないかという風に考えています。それが画一化されていくような、西洋的な価値観にまとめられていくようなグローバル化に対抗する力があるんじゃないかということを言っていて。

そういう関係から、最初は私、富澤さんや陳さんの発表は、リージョナリズムではないですけど、地域的なナショナリズムについての話題なのかな、と思っていました。しかし、台湾の人形劇も日本文化を取り入れながら発展させていったということもあるし、自分の文化を守りながらも色んな文化を交流しながら発展させていこうということがお二人の発表の共通点ではないかな、と思います。こういった点に対して、何かご意見があればお願いします。

K さん[2]：ひとつ質問ですが、帰国子女はいますか？
（挙手者なし）

K さん：いないですか？あれ、いないの？僕は上智大学の出なのですが、後輩とかに会いにゼミにいったときに、ある年代から突然帰国子女が増えて、五割くらい手が挙がる。そうするとね、まったく今までの先輩面の経験値がないのね。だからみんな経験されたことが違うから、非常に当惑した思いがある。やっぱりそれくらいいろんな教育経験を経た人が多い。今日は、みなさん「国産」ですか？

（一同笑う）

K さん：そうだったら話はわりとわかりやすいのかもしれないけど。

富澤：発表に関して、何でもいいのでご意見お願いします。

伊藤：昨日話したことにもちょっとつながるかなと思うのですが、日本の文化だって言ってるものを意識しつつも、それだけにこだわるのもナショナリズム的な感じがしてどうなんかなということもあります。私が留学したときに、白人だけのクラスに入ったときにすごい劣等感を感じたんですね。ただ私がアジア人というだけで劣等感を感じるんです。その時日本って、何が勝っているかなと思ったときに、日本は文化があると思ったんです。でも日本は文化があると言いつつも、自分は日本文化のことを何も知らない、と感じました。はじめて留学に行って、自分は日本人だっていうアイデンティティを感じました。

藤野先生もさっき「混浴温泉世界シンポジウム」で仰っていたように、例えば日本って外国人が結構少ないじゃないですか。アイヌだったり、在日外国人だったりっていう人達も住んでいるのに、日本というと「日本人が住んでる国だ」って、そういう人たちのことを忘れかけています。それは、ただ私たちが日本人というアイデンティティに対して何も疑問を持たずに生きてきたからだと思うんですけど、ヨーロッパとか移民の国に行くと、色んなアイデンティティを持ってそれゆえに迷うことがあると思うんですね。そこで模索したからこその、もっと中身のある文化があるんじゃないかと思います。

日本の近代国民国家と国民文化、及び国民文学との相関関係

藤野[3]：問題提起、いいですか。国民文化の話になって、色んな先生からおもしろい反応が出たなぁと思い出していました。富澤さんと卒論の話をしてた時に、ただ文化っていうのではわからないから、おそらくあなたが考えてるのは「国民文化」という枠取りをしたほうが明確になるだろう、そういう提案をしたんだよね。というのは僕らは国際文化学部というところに長くいて、国民文化に対して常にクエスチョンマークをつけるタイプの先生が多いし、僕自身もやっぱりそうなんですよね。

なぜそういった問題が出てきたかというと、文学部ってところがありますよね。文学部は明治以来、東大文学部を中心に築かれてきました。文学部内の専攻は「哲史文」と言われてて、哲学と歴史学と文学のことなんです。僕も「ドイツ哲学」なんてつい言っちゃうんだけれども、各 3 分野のなかに、またさらに国民国家分けの枠組みがあるんですよ。文学だったらドイツ文学、フランス文学、英文学、中国文学とかあったりとかして。さらに一番ややこしいのはね、「国文学」という言い方をするんですね、日本はね。日本文学じゃない、国文学ですよ。これって、世界どこみてもないんですよ。自分の国の文学を、例えばドイツ文学だったらゲルマニスティックというんだけど、これはまぁジャーマン学ってことですよね。自分の国の文学に対して、本居宣長までさかのぼらなきゃいけないわけなんです。「国学」とか「国文学」と言

いますが、国文って国語でしょ？歴史だって、日本史なんて、国史なんて言ってたんですね。

国っていうのは自明のこととして埋め込まれているというか、前提とされているんですよね。つまり、逆にいえばそれだけ強力なバイアスがあって、国民国家を急速に作らなくちゃいけない国の場合、日本という国民的なアイデンティティを一気に型にはまるようにつくっていかなくちゃいけない。東大を頂点にしてね。そういう日本の近代国民国家と国民文化、あるいは国民文学との相関関係をもう一度洗い直す必要があるんですよね。その中で実は、多様性を排除し、さらには多様性が埋め込まれているのに表面的には忘却を強いられてきた部分もたくさんある。それが富澤さんの問題提起とも重なるんだけど。

<u>日本におけるナショナル・マイノリティのアイデンティティ</u>

藤野：例えば僕はドイツにいったときに、どういうことに関心があるかというと、日本の国民文化というよりも、日本の中にはどういうナショナル・マイノリティがいて、彼らにはどういう言語や文化があるのかっていうのを聞かれるんですね。例えばアイヌとか沖縄とかっていうのは比較的わかりやすい形ででてくるんだけど、例えば、在日朝鮮人、韓国人の文化っていうのはどういう形で扱われているのか。在日文学というのは、最近は認知されてきたし、姜尚中っていうスターが出たから、現在のものすごい韓流ブームなどといういきさつがあると思うんだけど。

これまでずっとオフレコになってたのは、日本の国民文化と呼ばれているものの大部分とはいわないけれども、かなりの部分を実は「在日」が担ってきたということです。そういう事実がある。それは外目には言い出すことはできない。たとえば紅白歌合戦ていうのは、みなさんもう見ないかもしれないけど、僕らにとってみればね、年末の最大の楽しみですよね。紅白歌合戦に出ている人たちの大半は在日の人たちなわけですよ。だけど伏せられている。レコード会社とかいろんな所によって忘却というか、あえて伏せられている。国民的なスポーツでいえば例えば力道山とか…殺されちゃったけど、ああいう人達もそうだし、野球の選手にしても、国民的スターという風に脚色された人たちが実は「在日」というルーツをもっていて、そのことを言えなくなっている。ものすごい権力的な圧力というものがあるんですね。山田洋次さんはカミングアウトしてるのかな、わからないけど、寅さんもそうだっていう話がある。日本の国民文化として輸出され日本でも自明のものとされているものが、実はそうではない構造で成り立っている。そのことが隠蔽されているっていうことを相当考える必要がある、ということなんです。問題提起として。

もちろんそういう話題を出せば、僕に対する反論とか別の情報というのが出てくると思ったから、あえて危険なことを言っておきます。

女性A：ひとつ質問していいですか？どうして在日の人達は、国民文化として受け入れられないんですか？同じじゃないですか、同じところに住んで同じものを食べて。それをどうして一つの枠にはめられないんでしょうか…同じ枠組みに。どうして分けないといけないんですか？

藤野：いえいえ、分けるという以前に、日本の文化という枠の中で、在日の人達が生き、活動し、表現行為をしてきたわけですよね。そっちのほうを言っているわけです。ここまでは日本人の純粋な文化ですよ、ここからは実は在日の人達の文化ですよって明示する必要があるかどうかっていうことは、僕は言っていません。

女性A：その在日の人たちは、自分たちのルーツをいわゆる日本人とは区別したいんですか？それとも…

藤野：自分のアイデンティティに戻りたいかどうかというのは、非常に複雑です。自分は日本人だと思って育ってきたが、ある時期、そうじゃなくて韓国や朝鮮にルーツがあると知ったときに、普通ものすごく悩むんですね。姜尚中さんだってそうだし、僕の知っている人にはみんなあるんだけど。そのときに日本名を名乗るのか本名を名乗るのかっていうのは、彼のあるいは彼女のアイデンティティにとって非常に微妙な問題になってくるわけですよ。自分は韓国籍である、朝鮮籍であるということでこれから日本で生きていこうとするのか、もうそんなことは自分にとっては…どうでもいいとは言わないけども、あまり重要な問題ではなくて、やはり日本人として生きていくことを選ぶのか。

女性A：それって血が「元を正せば別の国の人だった」というだけで、文化としてはこの国に住んでいる人の文化として、ひとつに考えられないのですか？

藤野：もちろん考えられますよ。つまり自分でもってカミングアウトして、朝鮮で生まれたけれども日本で育ち、日本語を使って表現をしている。だから自分は、日本人として生き、芸術活動しているんだ、と自分の選択権でいえるようになれば僕は問題ないと思うんですよ。でも僕が問題にしているのはそれを選べないこと、それは暗黙のタブーがあって、タブーのもとでカミングアウトできないで活動してきた在日の人達がたくさんいたということです。だけど、表向きは彼らの担ってきた文化が日本を代表とする国民文化として見られてきたっていう、その問題ですよね。

地域の歴史を理解する必要性

Kさん：現実問題として、日本人に帰化しないと不利益がありますね。在日のままだと公務員にもなれないし、選挙権もないわけだし。僕の友人でも、東京大学を出て大企業の役員をやっている人がいますが、内緒ねって告白されました。そういう話もある。非常に不利益があるので、表立って言うことはないけども、実際芸術家はさらけ出すからね。例えば柳美里とかね、差別の葛藤の中で、黄金町あたりで育ってるわけですよ。あの町を徹底的に破壊したのは日本なのね。そこをアートの力でというか、大きなお祭りの前哨戦で、大変なディアスポラみたいなものにしてしまったんですね。そこにアートが根付くのだろうか？根付く訳がない。こんなひどいことした後にって思ったんだよね。その辺から、今日の話の「国際性」というのは、能天気な国際性じゃなくて、実はすごい棘をもった国際性なのではないかと思っています。

台湾の人は、日本と仲が良いわけです。戦略的に台湾のもつ複雑性のなかで、戦後、日本と仲良くしたほうが良い、ということになったからです。にも関わらず、日本は中国と国交回復するという裏切り行為をしているわけです。でもその裏では手をつないでいるという実に複雑な関係があるんですね。僕は日本人、って能天気なこと言ってる人は日本人じゃない。ほんとの日本をわかってないんです。アイルランドがあるイギリスだって、国際社会っていうのは必ずそうなんです。ハンガリーだって少数民族がいっぱいいるし、非常にデリケートな問題を抱えてる。

そういうことがわからないと、アーティストとしてコミュニティに入っていけない。個々の地域がなんで別々に存在するかっていうと、地域同士が昔、深い怨念の喧嘩をしてたりする訳ですよ。だから今、市町村合併を無理やり一緒にしても、絶対やつらとは祭りを一緒にできないっていう所が全国に山

ほどある。みんなヒストリーを持ってるんです。だからこそ、相互理解を進めないといけない。壁がある、断絶があるから交流があるわけ。単なる国際理解というものが薄っぺらい言葉にしないようにしたいなと思いますね。だってこないだでしょ、東ドイツが戻ったのはね。

文化を細かく考察していくことが必要

男性A：富澤さんの発表で思ったのは、文化とは何だっていうことです。たまたま僕、朝４時くらいにNHKを聞いてたら、「文化とは習慣である」と言われてて、僕はなるほどなと思いました。例えば別府の文化は…ほとんど下着のような姿で風呂に入りにいくっていうのは、別府固有の文化で、それと同じように日本固有の文化もあるだろうし、例えばほとんどの世界で共通の習慣としての文化もあるだろうと思います。アジアだとある習慣を理解できるとか、先進国だからある習慣を理解できるとか、色んな文化を共有できる人達の層っていうのは変化しているものだと思います。

おそらく国際交流事業で違和感を感じられていたのは、固有のものだけを紹介しているというやり方のなかに、世界どこでも通用するバレエというものが入ってくるという違和感じゃないでしょうか。けど、もしかしたら現代アートだって世界共通の言語だろうし、そういうものを通じて交流するっていう手法もあるんじゃないか、そういうことかなと僕は思ったんですけれども。だから国民文化という言葉を使われていたけど、先ほど言われていたように、文化は色んな階層に分かれていて、日本に固有の文化だったり、世界中に通用する文化だったりすると思います。色んな文化に階層があって、階層を構造として組み合わせることで、事業を構築しようと、それだけの話だと僕は思ったんですけどね。そこまで言っちゃうと、結論みたいになってしまいますが。もう少し文化を分けて考えることで取り組みについて考察されたほうが、すっきりするのではないでしょうか。

先ほど言われてた日本文化も、日本国籍の方の文化なのか、日本というこの土地で営まれている文化なのかとか。韓流ドラマって、もうすでに日本の国民文化といっていいと思うし。日本人的に解釈して、習慣として受容されてる訳だから。

富澤：分けるっていうのは、定義を分けるということですか？

男性A：定義じゃなくて、習慣としてどういうエリアで行われているかとか、どういう人たちが行っているかとか、どういうタイミングで行っているかとか、歴史の中で色々あると思うんですが。そういう風に分けて、それぞれをこの分野のものはこういう形でできるよね、とか。こういうタイプのものだったらこういう風な交流ができるんじゃないかとか、そういう風に考えたらすっきりするのではないかな。

インターネット情報と生活との体験の乖離

西牧[4]：富澤さんの話ばっかりになってしまってすみません。僕まだ大学生なんですけども、すごく思ったのが、インターネットがあるから色んな情報が入ってくるけど、実体験と持ってる情報の乖離が、世代が下にいくにつれて激しくなっていくというか…土地は近いんだけど、精神的にすごい距離を感じてしまうっていうのが、僕個人が別府で生活していて思うことなんです。

文化に関して富澤さんが始めに問題意識として出されてたのは、ジャパンウィークで上演されたバレエを見たときに、これは日本の文化じゃないという違和感を持ったのはなんでか、っていうことでした。それは、自分が日本文化に対して持ってるステレオタ

イプと、海外からこう思われているだろうというステレオタイプ…その場合オーストリアの人やったりとか、海外の人は日本の文化って言ったら例えば着物や忍者と思ってるやろう、っていう思い込みではないかと思います。

それはきっと主催している人間が、要は日本の最大公約数をまとめて、相手のオーストリアやったりとかアメリカとか…日本に興味がある人間を相手にしてるとはいえ、オーストリアの中の色んな人っていう最大公約数に対してぶつけないといけないという類いの行事やったからではないかと思います。マス対マスではないけども、マスをまとめた人間がマスに対してアプローチ、紹介するという状況だったのでは。

富澤：ごめんなさい、ちゃんと説明してなくて。ジャパンウィークは公募なんですよ。私やりたいという団体があれば、ほとんどの場合 OK です来てくださいっていうことで、自分たちが行けるんですね。だから主催者側が、「これにしよう！」って言ってやったわけではないけど…でもやっぱりいわゆる日本っぽい文化団体ばかりの応募になってしまう。そういったことを、もやもやと論文では書いてるのですが…

西牧：今のでちょっと修正をすると、自分を中心にしていうと、インターネットがあるから個人と個人がつながるというメリットが先にあったと思うんです。教科書でクラス 40 人が学ぶよりは、インターネットで自分の興味があるところをどんどん調べていくということです。

例えば日中のビデオが流出してって話になってきた時に、今日友達がふと言ったのは、中国人ですごい仲いい友達がおるんやけど、今回の問題で話をしにくくなったと。オッスとしか言えんくなったと。脚色されたコメントやとは思うんですけど、そうなったときに、伝える人間が個人なのか、団体なのか、ていうのですごい差は出てくるのかなと。

問題提起でもなんでもなく、ただ僕のコメントなんですけど、例えば日本が今やろうとしている「クールジャパン」が政策となった時に、僕たちが個人で感じる違和感ていうのはそこにあるのかな。誰が主催して誰をターゲットにしてるかっていうのも疑問だし。

K さん：さっきね、シンポジウムで議論があったでしょ。アートリテラシーの定義についてね。あの先生は、ばりばりの国家公務員上級職から大学に来た人なんですよ。霞が関の親衛隊みたいな人で、非常に抽象化の度合いが高い人です。秋元さんは抽象化の度合いの低い方に本質があるという理解だと思うんで、そこでのバトルに一瞬なってしまいました。彼女が別府に来られた時に、天下りじゃないよといいながら天下りっぽい思考を持っているんで、みんなでかみついた覚えがあります。とても素敵な女性で良い方なんですが、どこか思考に長年の霞が関暮らしのしみついたものがある。同じ日本人でも、魚の頭から考える人としっぽから考える人がこんなにいるんだというね…背景を解釈しないとわかんないでしょ。あんまり霞が関にアンチなこというと、勲章ももらえなくなるし。ごめんね、雑談になりました。

西牧：っていうのが、富澤さんの発表には先生方からのコメントが先にあったけど、同じ世代の大学生からしたらすごいわかる話やったなっていうのがありました。どこがスタートにあるのかな、と。

富澤：国と国との間の国際交流って言っていいのであれば、それは全然普通にできると思うんですよ。私も中国の友達がおるし。私が思うその子と中国がやってることの乖離が

すごすぎて、ほんまに中国の子なんかな、って思ってしまうこともあって。ただ国際交流事業としての卒論だから、国際交流事業としてどういう論点があるかが焦点、っていうのかな。文化庁の、クールジャパンっていうのか、日本の国力を挙げて発信しましょうっていうことも私は卒論の中で批判しています。それは発表ではちょっとはしょってしまったんですけど…。誰か思うことがあればお願いします。

イメージとしての日本文化と実感としての日本文化

APU[5]学生：APU の学生です。ありがとうございます、すごくおもしろくて。文化っていうかステレオタイプがここで議論にあげられていると思うんですけど、ステレオタイプがいけないのかっていうことを聞いてて思っていました。枠がなければどうやって…最後の所で、なんでもいいじゃないかみたいな話が出たと思います。じゃあ本当になんでもいいのかっていう話があると思うんです。

おそらくジャパンウィークを見られたときに直感的に、これはまずいなと思った何かがあると思うんですよね。それをもうちょっと定義をきちんと厳密にして、さっきおっしゃったように、層を分けるという言い方だったと思うんですけど、それは何か自分の主観的な感想を客観的な意見として言うというよりも、主観の中に、これが人に伝えるときに有益となるという文化として、「文化」っていうのもたぶん括弧つけないといけないと思うんですけど、あるのかなと思いました。

なので、ステレオタイプがいけないなら、なぜステレオタイプがいけないのかとか、実際にもしかしたらステレオタイプ的なメッセージの中に、良い部分もあるかもしれないじゃないですか。それをきちんと見ていく…おそらく歴史を見たりってことになると思うんですが。

那木[6]：同じようなことなんですが、富澤さんは何かが怖いとか何かが不安だから、バレエをやってることにあれっと思ったと思うんですけど。具体的に、何が怖かったのかな？

富澤：怖いというか、なんでやるんやろうと思って。それに対する違和感です。難しいんですけど。私って、ジャパンウィークでこれが見たかったんや。日本文化ってこれやと思ってたんや、と気づいたというか…

那木：私だったらきっと同じように思うと思うんですよ。おいおいそれかよって。でもそう言われたらそうですね。

伊藤：留学してた時の話になるんですけど。私も劣等感っていうのがずっとあったくらいなんで、そういうのをもし私も見たら、たぶんえっと思うと思うんです。それはたぶん私の場合だったら、西洋に対してアジアが劣っているような感覚を持っていたので、西洋が見たい日本を見せないと、日本のことを相手にしてくれないんじゃないかと思ってしまうからです。

富澤：勝ち負け…ではないかな。

伊藤：私はそういう感じをオーストラリアで感じてきたんですが…。

橋本みなみ[7]：直接つながるかわからないんですけど、セッションとしてはアートの話題ということに一応なってるけど、やっぱり文化が焦点じゃないかな、と思いました。伊藤さんは文化というと、どこかに対しての日本文化、「何対何」ってなっちゃう感じがあるのかな。日本文化を見せなきゃ、っていう感じです。それって「誇りにしなきゃいけない」というニュアンスなのかな、って思ったんですよ。私は文化を誇りにするっていうスタン

スもあると思うし、敢えて誇りにはしないというスタンスもあると思っていて。

それは多様性の話にもつながると思うんですけど、例えば「誇りにする」っていうのは、純粋に誇りにするっていうよりも、もしかしたら何かと比較して誇っているんじゃないかな、って思います。私が過大に捉えすぎているのかもしれないですが。何かに対してこちらはもっと固有性があるとか、やっぱり比較することなしには誇りにはできないのだろうな、って思っているんですよ。それは文化はアイデンティティを保つために守るべきもの、みたいな捉え方ではないのかな。

一方、誇りにしないってどういうことかなって思ったら、ただそこに文化はあるものだから、自然発生的なものだから、人間の活動だから、敢えて誇りにはしないんだっていう風に、自分自身感じることもあるんです。誇るなんてあえて言う必要ないんじゃないか、そうすればむしろ、色んな文化が多様に共生できるんじゃないかなって思う事もあるんですよ。ただ、でもその一方で、さっき言ったみたいに、「日本をどう思う？」と言われたら、着物があってお茶があって誇りに思うって言っちゃう自分がいるんです。それに違和感は感じるけども、みなさんが文化を、グローバリゼーションの中で誇りに思うか思わないかっていうのを、何かあれば聞かせてほしいです。

伊藤：私はあまり誇りには思ってなくて、誇りに思いたい一方、全然知らないから誇りに思えなくてすごい気持ち悪いみたいなのがあります。だからといって誇ろうと思ってるんじゃないんですが。

平井[8]：なんか、伊藤さんの言葉のなかで、私は日本文化のことを知らないっていうのが、みんなの違和感のもとだと思いました。ずっと日本で生まれ育ってきたのに、日本文化を知らないって思うのは、やっぱり国民文化っていうのが、自分の生活は日本文化とは違うものだって考えているからだと思います。個人の感覚と、知らないといけない国民文化、日本文化が別の枠組みであるっていうことに、たぶん違和感があるんじゃないかな、と思って。さっきの aki さんの発表のなかで、現代書と伝統書道が子供たちに全然違う風に受け取られるっていうのも一緒のことかな、と思いました。

aki：書道とはこういうものっていうイメージみたいなものね…

平井：自分で縛っているイメージっていうものがあって、一方で現代書っていうのは今の自分を表現できるものだと思って、楽しんでいるんじゃないかなと。まとまらないんですけど、その辺の違和感っていうのが富澤さんの問題にしていることにもつながってくるんじゃないかなと思いました。

北岡[9]：九州大学の北岡といいます。「自分の文化とは何だ？」て言ったときの違和感みたいなものって、先ほど先生達がおっしゃった、隠匿された歴史などを自分たちが知らないとかいったことからきている気がするんです。あとは、自分たちのいわゆる伝統的な音楽や芸能を、音楽の時間に習っていないとか、習ってもちょっとだけだとか。例えば、リコーダーは吹いたけど、尺八は吹いてないとか。

でも、そういうことがないから、自分が外国に行った時に日本はこういうのだよ、って言えない部分もあるんですけれども、誇りに思うかどうかっていうときに、自分は日本で生まれてきて、西洋の文化とかアジアの色んな文化をどんどん自分たちで拾ってきて、なおかつ独自のものを作ってきて、でもうまく海外に出していけないという、すごく不器用な日本っていうのも全部含めて、自分がそう

いう中で育ってきた日本人なんだっていう、アイデンティティ的なものは持ってます。だから、それを誇りという言葉にするとすごく大々的になってしまうんですが、こういう自然にめぐまれた中で、色んな情報も入ってきやすい中で、のうのうと生きてきたんだけれども、それが日本人の私なんだっていうような、誇りに近いものは持ってます。

ただ、海外に発信していく時に、そういうものがないっていうのは、今までの教育とか、色んなうやむやがあると思うんですよね。そういうものって海外の教育だと、自分達の歴史などをしっかりと学んでいると思うんです、私たちよりも。そういう部分でちょっと一歩引け目を感じてしまうとか、そういう感覚があるのかなと思います。

アートとなるまちづくり

男性 1:すみません、ちょっともう帰るので、aki さんと陳さんの発表で思ったことを言わせてもらいます。おそらく時間がなかったのでここまでだったのだと思うんですけど、地域とアートとか、例えば人形劇と地域とか、そういう観点からもし考察するんであれば、地域って何なんですか？っていう疑問が出てきます、

私自身、実は別府で生まれて、高校から別府を離れて東京で商社をやってて、それで世界に行きました。家を継ぐってことで地域に帰ってきたけど、先ほど aki さんの言われた田舎に対する劣等感のかたまりのような状態ですよ、戻って来た時は。この田舎で、なんでこんな儲からない旅館を頑張るんだ、みたいな話。だけどこの劣等感を解消してくれたのはまちづくりです。地域のことをたくさん知ることができたっていうのと、もっと大きかったのは実は地域に色んな仲間ができて、関係ができて、人と人の関係ができた。そういう実体験からいくと、僕は地域とか地域づくりっていうのを、関係をどう修復していくかとか、新しい関係をつくるかっていう活動であるともう思っちゃっていて。

ということからみると、aki さんが龍神村で活動した結果、龍神村の中とか外との関係が aki さんが入ることでどう変わったとかね。aki さんと龍神村の関係だけじゃなくて。aki さんが入ることでそこの全体の関係がどう変化したとか。台湾の人形劇がある地域で行われることで、そこの地域がどう外とつながっているかとか。そういうことを言っていただけると、やっぱりアートとかそういう活動っていうのは地域にとってやさしいんだとか、プラスなんだっていうのがわかるんだけど。aki さんが子供たちに働きかけてこうなったという話だけだと、それは aki さんの活動が子供たちにいいっていう話なのかな、という気がして。もうちょっと時間があればそこに手を入れてはどうかな。

僕ら NPO やってまして、実はわれわれ別府で活動してる NPO が常にやってるのは、ステークホルダーを完全に一枚の紙におとしこんで、その人たちがどういう風につながってて、どう作用しあってて、今後どう変化していこうというのを考えながら活動していくことで、それが地域づくりだと思っていて。アートだって僕は同じだと思うんで。アートが入ることでそこがどうつながっていくか。そういう風に言っていただけると、僕的にはすごくわかりやすいというか、理解できるかな、と思いました。そこがまだ十分伝わってこなかったので、そこを教えていただけると、もっとよかったなという感じです。すみません、では失礼します。

歴史の営みから見る日本の国民文化

石谷[10]：また国民文化みたいなほうに戻してすみません。今聞いていたなかで、ただ単に私がぐるぐる考えたことをお話させていただきたいなと。もしなにか意見があればということで言うだけなので。国民文化っていう

言葉に、私も正直すごくひっかかりました。富澤さんがバレエを見たときにえっと思った感覚も私は理解できて、ジャパンウィークでバレエを見て、なんでえって思うかっていうと、私の中の判断基準としては、バレエのルーツはヨーロッパじゃないかと思うからだと思うんですよ。そういうことを考えた時に、バレエってものはひとつの例で、他にもそういうものってきっといっぱいあります。日本には明治維新の時とかに、西洋に追いつくために、国の政策として、西洋の方からいっぱい色んな文化を持ってくる時期がありましたよね。

私はオーケストラをずっとやってきて、クラシックが好きでずっとやっているんですけど、こんなにも自分の身近にあって自分にも染みついているクラシックを日本の文化とは思わないのは、やっぱり明治維新のときに国が今まであった日本の音楽教育というのを頑張って頑張って変えて、作ってきたものだというのがあるから、クラシックというものがこんなに身近にあっても、日本の文化って思わないのかなと思いました。となると、国家が国民文化っていう概念を作ってるとしたら、そもそも国民国家っていうもの自体が、なんとか条約とか、なんとか大戦とか世界史のある時にできたものですよね、たぶん。ちょっと詳しくわからないですけど、ウエストファリア条約ですよね。

でも、国民国家ができる前から、たぶん私たちがなんとなく文化って思うものはあったはずです。例えば日本だとすると、ずっとずっと遡っていって、縄文とか弥生とかまでずっとずっと遡って考えたときに、でも日本の人って中国とか大陸から来たんじゃない、って思うんです。そしたら日本文化ってどこまで遡ることができるのって、そうなると、大陸から来たものでも、そういう歴史を経たものが日本文化じゃないだろうか？そこまできてやっと私は納得したんですよ。今このセッションの中だけの、短絡的な考え方ですけど。色んなものが入ってきて、変化をふまえてきたものを日本文化だという風に思うのかもしれないけど、なぜか明治維新の時に入ってきた西洋のものは、私にはまだ日本の文化だという風には思えない。その差はいったいどこからくるのかというのが、今の疑問点です。それをさっきからぐるぐると考えてます。

能松[11]：ちょっといいですか。僕も似たような感じで、さっきからみんな日本文化知らないって言ってるけども、例えばさっき例に挙げた、三島を知らないから必ずしも日本文化を知らないかというと、僕はそうじゃないと思ってるんです。知らないことってたくさんあると思うんです。文化の定義になってくるんですが、文化を知らないんじゃなくて、歴史の営みを知らないというだけで、文化を知らないこととはつながらないと思うんですね。だって江戸時代のものが文化で、今あるものが文化じゃないのかってそうじゃなくて、文化とは習慣ってのもありましたけど、今ここに息づいているものを文化だと僕は思っているので、文化を知らないっていう風にはならないです。

正確にいえば、歴史を知らないから語れないってことだと思うんですね。まさにそこで、クラシックが文化じゃないのかって話になってくると思うんですけど、漢字だって、中国からの輸入品なんですよね。じゃあ日本の文化じゃないのかっていったら、うちの文化っていうわけですよね。少なくとも書道が文化だったら漢字も文化だってなってくるわけだし。文化は何だと定義するのか、というところとの兼ね合いになってくるんですけど。時間的な伝統が大事で、すごく昔からあるものイコール文化って言う風になっちゃうんだけれども、そうじゃないんだろうな、っていうのが僕の文化の定義というか認識

の仕方です。僕はあまのじゃくなので、聞いてて、この子こんなに日本文化知らない知らないっていうけど、本当にそうなのかな、って。

石谷：ですよね、だって知るっていうことは何か答えがあるっていうことで。

aki：知るべきものがある前提で、知らないっていってるわけだから…

石谷：そうですそうです。かちっとした「文化」があるっていう前提で、それを知るということになると思うのですが、なんかそういうものではないような…

K さん：それは間違いだと思う。必ず答えがあるっていうのは受験問題だけ。人生には答えのないものなんていっぱいある。

伊藤：私もこの違和感は明治維新に基づいているのかなと思っています。そこにあるのが文化じゃないか、っていう考えと一緒なんだと思うんですけど。その意味で言うと、富澤さんの考えでいいんじゃないかなと思うんですよ。ていうのは中国の文化とか朝鮮半島からの文化とかを取り入れながら、色々な変遷があって今の文化があるからです。なのに明治維新の時とか、たぶん今だって、私は法律とかよくわかんないんですけど、そういうのでかちっと固めるからおかしいんじゃないかなって思って。こういう風にいろんな文化が混ざり合うのは、本来のあるべき姿っていうか、それでまた交流して新たな文化ができるのもいいし、自然に身を任せるというか、それが自然なことかなと。

富澤：日本文化とか日本人とか、本当に便宜的に定義しているだけで、今はもう入り乱れていると思っています。いわゆるフランス系アメリカ人と日本のハーフの友達がいて、一緒に歩いてたらもう誰もが振り向く超美人なんです。西洋的な顔やけど、でも、アメリカのいとこに会いにいったら、「ほんまに日本人にしか見えへん」と言われて、私って何人なんかな、っていう話がありました。定義すると、絶対はみでる人とかものとか考え方がでてくるから…便宜的にやってるのでしょうがないけど…それを頭の中で固めてしまうことが、危ないなと。

ヨーロッパ及び日本における国民文化の創出

伊藤：それこそ藤野先生がさっき仰っていた、ドイツとポーランドの、ヨーロッパのアイデンティティの話には興味あるなって思っていて。

藤野：だからもう、ドイツは典型的な移民国家で、それを認めるか認めないかってのには問題があるけど、今日は話できなかったけど、吉本さんがシンポで話したルール工業地帯っていうのはね、600 万人歴史的にポーランド人が入っている所なんですよね。元々多文化共生地域で、名前をたどるとポーランド籍だとわかるような名前はたくさんあるんだけど、でも自分たちはもうドイツ人として生きちゃってるんですよね。というか、それが全然悪いことでもなんでもない。だからドイツみたいに実際に外国人比率が 20 パーセント近いようなところだったら、ドイツの国民文化って語るのは難しいわけ。19 世紀につくられたものだから。

　ホブズボームという人が『国民の創出』という本を書いていて、国民というのはつくられていくわけですよね。特にフランス革命前後に、何々人、何々人ってつくられていく。その中の装置として、文化というのはすごく大きな機能を果たしたんですよね。日本の場合は、明治維新以降、それを顕著に文部省な

んかがつくっていきました。国が、これは国民文化ですよ、国民文学ですよっていうのを決めて、教科書に落とし込んで教育されているんです。だからさっき言ったようにね、西洋音楽が 130 年保たれていても、それは日本の文化と思えないっていうのが出てくる。それは国がつくっていてその教育を受けているから、まさにマニュアルとして僕らは刷り込まれている訳ですよ。さっき韓国の人が日本の国民文化のかなりの部分を実は担っているというのがあったけども、僕はそれを現象としてネガティブに言っているのではなくて、そうやって日本の文化も現在進行形でダイナミックに多様性のなかでつくられてきているという、そういう事実がある。

にも関わらず、それを認めたくない人たちがいるっていう、その問題なんです。韓国の人やフィリピンの人が、例えば日本語を使って、日本の色々な方法を使って表現をするのも全然 OK だし、そしてそれがまた日本から外に発信されることも OK なんだけども、どこかで欽定訳みたいなものがあるのと同じように、国家的な力でもってレッテルが貼られて、ここまでが日本文化でそれ以外は違う。ルーツをたどると他から来たいかがわしいものだから、日本文化と認めないみたいなね。まさに多様性とかダイナミズムというもの、交流の中で生まれたものをスタティックに見る、それを本質主義というんだけど、文化エッセンシャリズムっていうものは、それをもうそろそろやめにしたほうがいいんじゃないかっていうことなんですよね。ただ世代がいろいろあって、僕らの世代はおそらく考えないけど、ある年代以上の人や、あるいは政治家なんかは文化本質主義というかね、日本文化ってこれっていうのは未だにあるので。

那木：定石だと思うんですが、初出を調べるっていうのは結構多いですよね。日本文化が、例えばやけど茶道とか着物って言い出したあるタイミングがあると思うんです。その時はポジティブな意味で、これとこれとこれにしようって決めたと思うんですけど、その発生地点が何十年前とかがわかったら話にリアリティが出てくるかなと思います。

義務教育による文化の認識

aki：そうですね、書道って芸術っていっていいんでしょうか、っていうのを私すごく言われることがあるんですよ。自分はアートとしてやってるつもりがあるので、あまり前置きなく言っちゃうようにしてるんですけど、私もグーチョキパーでアンケートしたいっていうくらい、芸術と思う人、そうじゃないと思う人、考えたことなくてわかんない人、みたいな感じだと思うんですね。

明治政府の話も出てきたけども、突然西洋の考えでやらなくちゃってなった時の、こしらえかたの影響っていうのは未だに知らないところでも出てて、書道ってけっこうそういう狭間に陥っちゃってることがすごくあって。日展とかいわゆる芸術展ですね、官展みたいなものでは書道部門ってあるんですが、芸術系、美術系のなかで学校教育のなかで書道家展ってないはずなんです。まだちゃんと調べきれてないんですけど、私の知ってる限りないんです。アカデミックな傾向のなかで書道をやろうと思ったら、教育大学、先生になるっていう方法しかなくて、高校は選択制の芸術科目としてあるのでちょっと違うんですが、小中と義務教育のなかでは書道は芸術として教えられてないんです。国語科の正しい文字をかくための教育としてやってます。

ということは、義務教育だけで日本人として出来上がるとしますよね。芸術の書道というものは知らないまま社会に出ます。だけど社会の中では官展とかで芸術と言ってたり、外国の人から芸術って言われたりっていう

そういう状況があるんですね。私は小さいひとから書道をやってた人ではないので、それがものすごい不思議で、自分の感じるところに基準があるので、自分の活動自体はあまりそういうところはそんなに重視せずに、自分のやりたいようにやろうと思ってるんですが、前衛系の書道団体とは関わってはいます。

今の話にもつながるけど、書道は伝統なものと扱われがちなんですが、本当にそうなのかな、っていうこともあるし、でも実際に私が自由にやろうとしたときに、学校では文科省の指導要領があるので先生になるのは無理なんですね、ああいうことしたくても。予算があって興味がある人がいれば、ああやってタイアップはできるんですけど。日本文化ってなんで今生きている文化じゃないんか、というところは、書道に関していうと、そういう装置がないというのがあって、だから正解としての日本文化みたいなものしか知り得ないという状況があると思うんですね。私はそういうところすごい大事だと思って、能松さんとかは法律とか行政をやってらっしゃるんで、そういうのを追究する立場にあると思うんですが、私はそれを地べたで見たときに、そういうことって通じるのかなとやってたら、子供たちは今日見てもらったようにフレキシブルだったんです。年齢が上がるにつれて難しいところは増えていくというような状況を、すごく感じます。今の日本文化の話の中では私から見たらそういう所があるよ、ということでした。茶道・華道については、私はよくわからないですけど。

K さん：芸大なんかでもさ、あるんだよね。西洋音楽やらなきゃいけないんだよね。楽師さんたちが、自分達でも気持ち悪い音楽をやらないといけない。無理やり弾かされるらしい。やはり国が決めたことは、お決まりのことをやらなきゃいけない、みたいなところは徹底してますね。雅楽やってる人は西洋音楽やんなくてもいいと思うんだけど、一応まずいらしいですね。変な国ですよ、だから、日本は。そう思ったら間違いない。世界的に変な国ばっかりだ。正しい国なんてどこにある？

西牧：さっき K さんが、お前三島を知ってるかってよく言われるという話をしてて。僕の大学で今一緒に学んでいる、ルームメイトが台湾の子なんです。ルームメイトが吉本ばななのキッチンを読んでたんですね。翻訳の本を読んでて。僕は三島なんてそれこそ『金閣寺』くらいしか読んだことはないけど。村上春樹も吉本ばななもそれなりに数冊は読んだ。それを僕は中学校の時とかに読んだんで、それこそ文化というか高尚なものって思ってはないですけど、海外の人は「オー、ハルキ」、「オー、バナナヨシモト」って思うらしいんです。僕なんか村上春樹に関しては、変な話、悩める少年が旅をするみたいな話を書く人やろうぐらいにしか思ってないので、自分たちの読書の習慣の中で消費した村上春樹っていうだけの話です。

K さん：村上春樹みたいなローカル性の高い文学が世界でうけるなんて。だって早稲田とさ、西武新宿線でジャズ喫茶やってた人しかわかんないような、具象に満ちてるものを、よく世界文学として売ったよね。

西牧：今日の午後の話でも出てたような、村上春樹が生まれた日本、吉本ばななが生まれた日本の人間が、「オーハルキ、神」になってる人もいるけど大多数の人がなってない。別府の温泉にしても別府の人にしたらもう習慣になってるから、神戸から来たらおーすごい、こういうところがあるんか、っていうその感覚と同じかなってそう思いました。

外国から見た日本文化と実際の日本文化の差

石谷：今日本の話ばっかりしてるので、陳さんの話についても。日本文化っていうよりも、その国の文化っていうことで、台湾の陳さんから聞きたいです。

陳：そうですね、今までみんな日本文化についての話ですが、台湾の学校では、日本文化の教育としては、さっきみんながおっしゃったような、着物とか忍者とか琴とか、あとは東京発信の文化が一方通行で受け入れられました。この１年半神戸に住んでいて、同じ台湾からの留学生と話したんですが、台湾で受け入れられた日本の文化と実感する日本の文化は、すれ違いという感じがしません？と。そうですよね、今まで受け入れられた日本文化は東京発信の文化で、日本文化というより東京発信の文化が日本文化の全体像として取り入れられたんですよ。１年半神戸に住んでいて、日本文化がいろいろな側面から見られることもあって、単純に東京発信から、一方通行から、見ることはできませんよ、っていう感想が私たちの中からでてきました。

富澤：例えば何がありました？

陳：例えばはじめて日本語を学んでいたときに、アクセントですね。台湾にいたときは、必ずこのアクセントしか正解にできない、ってよく先生に言われました。最も正しい発音は「先生」で、「センセイ」（関西弁のアクセント）っていうのはだめだと。神戸に来たら結局、研究生もみんな「センセイ、センセイ」（関西弁のアクセント）と言っている。

（一同爆笑）

陳：どちらのほうが正しいか、そんなに正解がないっていうのが文化ではないかと思いますよね。

北岡：一般的にその国に対して、その国はこういう文化だよねみたいな持ってるイメージと、実際行ってみたら違ったっていうのは他の国でもあると思うんですけど、日本が甚だしいんですか？それともどこにいっても同じようにある？

K さん：アメリカなんか州によって町によって全然ちがう。ヨーロッパなんてひどいもんだよね。イギリスとフランスとかドイツとか、全然違うし。

地域を出発点としたアイディティの確立が重要

女性 B：すみません。ずっと聞かせていただいていて、もうそろそろ退出しなければいけないので、最後に感想だけ。

全然論文の足しにも何もならないと思うんですけれども、先ほどから聞いていて思うんですが、日本文化がどうだとかどういう定義をするかという話をされていたと思うんですけど、歌舞伎だったりお華だったりとか、いろいろ体験されたことがあるというのはもちろんすごく素敵な自分の経験になると思うんですけど、日本ていう以前に、地域、みなさんがそれぞれ生まれ育った地域のことを、もっとアイデンティティとして認めていいんじゃないかと思うんです。

龍神村の事例を聞かせていただいて、グローバリゼーションが龍神村でどうなんだっていうのと同じで、きっとこれから外国に出ていく子も、山奥の村から出ていく子もいると思うんですけど、その時に彼らが、例えばアメリカに出た時に、劣等感を感じないでいられる方法っていうのは、自分は日本っていう国だけどもその中の和歌山県の龍神村というところで育ったんだよ、そういう地域でこういう暮らしをしてこういうものを食べ

て、大きくなりました、だからこういう価値観をもっています、って言えることがすごく力になると思うんですね。それは日本ていう以前に、みなさん神戸とかなんですかね。もっと小さいローカリゼーションのようなところを持って、初めて日本ていうところをスタート地点にしたうえで日本という国を語れるだろうし、外国に出た時に自分っていうのはこうですよって話せるんじゃないかと思うんですね。論文の書くうえではそんな定義とても使えないとは思うんですが、みなさんまだお若いので、それぞれが自分のアイデンティティって何だろうって考えてみてください。

私も全然違う県から大分県から来て住んでいるので、私も自分のオリジナリティとかアイデンティティって何かからなんだろうって思うことはいっぱいあるんですけども、若いともっと思われると思うんですね。論文はおいといて、自分のアイデンティティってなんなんだろう、っていうのをもう少し考えてもいいんじゃないかな、と思いました。

aki：龍神村の話を言っていただいたのでちょっとだけ。学校の先生なんかいうんですよ。「めっちゃ良い子なんですみんな」って、この学級崩壊の時代に。もちろん先生もよくって地域の人もよくって。一昔前の日本ってきっとそうなんですよね。タイムマシン的な感じなんですけど、本当にいい子が多くて。私なんかは絶賛するんですけど、先生は、「都会へ出ると委縮しちゃうんだよね。みんなここにいる時だけなんだよ」、って言うんですよね。それは本当に悲しいことやなと思って。先生はそうやって委縮するのがほんとうにかわいそうというかもったいないと思ってるから、憂鬱そうな子がのびのびとできることにすごく注目して考えておられる先生がいらっしゃるんですね。そうやって呼んでいただいているので私はめっちゃ荷が重かったんですけど、最終的には楽しくするのがいいんだというシンプルなところに落ち着きました。作品を書いた時に、私の方針としては、全部ほめるんです。書道的にはそりゃいろいろあるんでしょうけど。1 回の体験ていうのもあるけど私の基本として、ほめるところは絶対あると思うんですね。そこをほめていくと、みんな、僕のここっていいんやって、すごくノってくるんですね。

良し悪しではなく、差異を認める

でもみんな同じものを書いてるわけじゃないので、矛盾するんですよね。ここいいって言ってて、ここもいいって言ってて、え、どっちがいいのって。だけどどっちもいいんですよ。そしたら僕のもよくて、この人のもいいんやと。あるのは違いだけなんやと。書くときはばんばん書いて、ここがいい、ここがいい、子供なのでだんだん遊びになってくるので、クールダウンするために、人のも見ようって言って、周りも見て、こんな感じだね、違うよね、違うけどどっちもかっこいいよね、っていうのをやっていくと、違いがあって、どっちもいいんやっていうのをもっと感じてくれているように思います。

答えがあったり、知るべき文化があったりっていうのは、ちょっとうまく言えませんけど、やっぱりどっちでもよくて、違いだけがあって、っていう感覚を得られたらいいと思ったりします。私はだから、アートの場合は作品のクオリティもすごくあるとは思うんですが、一般に見てくださる方の受け止め方としては、好き嫌いでいいと思ってて。僕はこれが好き、君はこれが好き、違うね、でいいと思っています、ベースは。わかるわからないじゃなくて、別にぴんとこないとか、あまり興味ないとかも含めて、好きかそうじゃないかを私はすごく大事にしたいと思っています。すみません、時間ぎりぎりなのに、ありがとうございます。

女性 C：うちの娘がですね、比較文化の勉強をしていて、今おっしゃったように、比較文化っていうのは、比較してどっちがいいとか何とかかってそんなことは関係なくて、それぞれの良さをどれくらい見出すか、見つけ出すか。その違いがおもしろいっていうのを勉強しているっていうのを母親として聞かせてもらって、あぁ、彼女は今こういう勉強をしているんだなぁというのを感じていたんですね。

私も今日はちょっと遅れて参加したんだけども、みなさんも今学生さんっていっても年齢さまざまなんですけども、勉強されているんだなぁと感じました。うちの娘が外国にいった時にやはり日本文化を持っていきたいっていうのがあって、その時に浴衣を持っていったんですね。浴衣を持っていって、みなさんの前で着て披露したんですね。その国はまだ日本人の女の子がくるっていうことはなくて、すごく「もえ、もえ、もえ」ってされて、自分としては日本文化を持って行ったっていう気があったけれども、全然彼女にとっては、帰った時に、何にも日本文化のことを知らないと思った。ただ着物を着て、ただそれを見せるだけでは、何にも伝わらないと。自分がすごくもっと地域に入ってもっともっと勉強したいって、感想として書いてきたのを今思いだしました。すみません、私、母親の立場で話させていただきました。

もうひとついえば、家に文化があるんじゃないかなって思ってます。私のところにはうちの文化があります。まずその文化を、家族のものとして大事にしたいなって思っています。それが基本であって、そこから地域があってっていう風に思っています。以上です。

国際交流における文化の差異の確認

石谷：先ほど「違い」っていう話が出ていて、私もその違いっていうもうちょっと硬い言葉で「差異」っていうものにけっこう昔から関心があって。また富澤さんの発表に関連するもので申し訳ないんですが、国際交流っていった時に、国際交流って何？って考えたんですね、聞きながら。違う国の人たちが交流して、新しく何かできるっていうのもあるし、差異を確認する作業なんかなっていうのもひとつあるのかなという気がして。だって差異がなかったら交流する必要はない訳じゃないですか。

APU 学生：話を聞きながら思ったんですけど、日本文化っていうのを考えていく背景に西洋があると思ったんですね。やっぱりグローバリゼーションという話も出たように、西洋化って置き換えることもできるじゃないですか。おそらく西洋ってやっぱり一神教の国だし、定義がきっちりとしている。その中で日本の曖昧な文化が評価されづらいっていうのはあると思うんです。でも先ほど aki さんの話を聞いてたりとかしたら、曖昧なところに良さがあるんじゃないかな、と直観的ですけどすごく思いました。確かに西洋に対して、納得いくような定義を出していかなくちゃいけないんだろうなと思いました。

K さん：西洋って言う言葉だけでもう定義不明ですよね。日本も不明だけど、西洋はもっと不明。色々ありすぎますよね。

藤野：全然違いますよ。だってヨーロッパとアメリカでも全然違うし、ヨーロッパの中でも全然違うし。僕はドイツ以外はあまりよく知らないんだけど、ドイツと日本の違いよりもね、大都市と小さな地域の違いのほうが大きいと思うんですよ。例えば、ベルリンと東京ってやっぱり共通の問題を抱えてるんですよね。グローバルな大都市の同じ問題を抱えている。そこがおもしろいんですね。地方都市には地方都市のこういう問題があるわけでしょ。それが日本とドイツの違いよりも、

大きいんですよ。大都市と地域との問題が。

K さん：別府の郊外が、ドイツと「農泊」で交流してるんですよ。田舎と田舎でね、すごい長い間つきあってて。みんな行くんですよね、いっぱい貯金してね、えらいですよ。農泊って言葉はドイツにないんですよ。農家は人を泊めるのが当たり前だから。日本には農泊という言葉がある。

ライフスタイルの共通性は世界中にあるけども、言語の違いでいえば 6,000 も違う言葉があるんだし、まして宗教と掛けて、掛け算したら違いのほうが多いわけね。でも楽しめない違いもあるのね。差別とか、意味のない偏見とかね。そういうところのリテラシーというのが生きてく時に大事なんです。僕らなんかも大失敗しちゃうわけ。ドイツの人にナチズムについて尋ねちゃう。なんでユダヤ人嫌いなのお前って。それはもう山ほど聞かれるから俺達はもう心にバリアを張っている。すごい重いでしょ、ドイツ人にとって、戦争とホロコーストはね。日本人だって、南京大虐殺に関して言われるけど、俺達関係ないよねって僕たち生きてる世代は思ってしまうけど、まだ根に持ってる人もいるし。教科書にも書いてあるしね。良い違いもあるけど、悪い違いもあるし、気をつけなきゃいけない違いもある。そこに対していい感じの behavior をできるようにすると、いい感じでどこのコミュニティでも生きていけるのかなって。

APU 学生:違いを認め合うっていうのは重要じゃないですか。

K さん：避けてもらいたい話題には触れないとかね。そういうのも勉強していかなきゃいけない。

女性 C：さっきの娘の話で、セルビアに彼女はいったんですけども、そこには色んな国の色んな学生が集まってきてて。みんなものすごいポリシーを持ってて、言ってもらいたくなるもの、触れてもらいたくないものってものすごいあるみたいですね。仲良くもできたけども、ものすごい勉強しなくちゃいけない、とすごい課題を持って帰ってきた。EU だとか何だとかいろいろなことを彼女は思い描いてたんだけど、そんなものはしゅわーんと飛んでった。

K さん：ハンガリーのロマね、ジプシーのバイオリニストが来たときに。ハンガリー人の隣にルーマニア人の子が来て、国際都市だから。近いからいいじゃない、仲良くしなよ、って言ったらさ、すごい緊張関係でした。想像できませんよ、こんなに憎み合ってる人達が国境を接してるなんて。能天気だよね。人類皆兄弟だと思ってんだから、とんでもないよ。

<u>文化の差異を認め合うことから混在へ</u>

伊藤：芹沢さんのリスペクトっていう言葉もありましたよね。留学して思ったのが、頑張っても理解できないことはあるけど、尊重はできるということでした。

K さん：さっき言ったんだけど、文化人類学ってやばい学問領域で、ある意味で政治的に、こっちは A 級文化、こっちは B 級文化っていう位置づけに使われがちだったっていうことを、APU の若い子に教えてもらったの。レヴィ・ストロースとかね、どんな分野もいろんな意味があっていいんだと、僕なんかは能天気な理解なんだけど、実は政治的にこっちは未開、こっちは文明みたいなことで、この人たちはちょっと指導しなくちゃいけないみたいな形で使われかかった学問領域なのかなっていう疑問があります。

藤野：いや、元々文化人類学っていうのは植民地支配からの実用学ですよね。文化相対主義なんかっていうのはレヴィ・ストロースになってからのことで…構造主義的で、相対化して、全部同じように見るっていう考え方は。

K さん：われわれは違いを楽しむだけしか能のない人だけど、やっぱり為政者とかね、権力者とか国民国家を指導する偉い人がそれを使って植民地化してやろうとか思ったんじゃないかな。こっちの文化が劣るみたいな感じで。そういう考え方も含め、歴史を学んで反省していかなきゃいけない。マイノリティのことを本当に考えないと世界の平和は来ないよ。アイヌの人たちのことも全くわかってないでしょ。沖縄の人のことも全くわかりっこない。

藤原[12]：世界平和の話を前にしてローカルの話題を出すのもあれなんですけど…。縁があって、ここ 1、2 カ月ほど天草で活動してまして、今週 1 週間も天草で写真展を開いてて、今日もそれで遅れちゃったんですが。天草っていうのはすごくおもしろい場所で、何がおもしろいのかっていうと、島原の乱があった時に、天草にいた人がほとんど殺されてしまったんです。天領地にしてしまうんですけども、その後釜をどうするかっていうので、全国各地にある藩をあたって、その藩に 1 万石につきいくつかの家族を天草に差し出しなさい、ってなって。天草っていうのは今も町によって微妙に方言が違うんです。方言だったりとか正月の伝統行事だったりとか。天草は陶磁器、窯がけっこうたくさんあって、今週も大陶磁器展っていうのをやってるんですけど、窯同士も文化が違って、11 年前に陶磁器で天草のまちづくりをしようって持ち上がった時に、ようやく窯の親分たちがみんな集まってきて、話し合うというかお互いの技術を見せ合ったりとか、お互いのアイデンティティを確認し合うということをやって、今はすごく仲良くというかお互いに交流し合ってるので、文化の違いに触れないっていうのもあるけど、一回やっぱり接近しないといけない部分もあるんじゃないかなと感じました。

aki：そうですね、私イギリスにしばらく行ったことがあるんですが、やっぱりわからないことが多くて、いっぱい地雷踏むんですよね。しょうがないんですよ。能松さんじゃないけど日本もそういう状態なので、そこで育っちゃったので、わからないですごめんなさいと、そういうところかなということもひとつ思いました。たぶんここにいらっしゃる方まじめなので、そういうこと知らなくちゃいけないんだという感じになるのかなという思いもあって。日本人のまじめさは大好きなんですけど、それが裏目に出る部分もあるよねっていうのもすごく感じたりします。

あと、彼の発言から世界平和の話になって。曖昧さっていうのが、私の受け止めでは「知らなくていいよ」ってことじゃなかったんやろうなって感じてます。さっき吉本さんだったかな、ケネディのジャパンウィークのお話で、混在してるのが日本だから、それを紹介したいっていうのがすごく印象的にあって。能松さんの言っているのも同じことだと思うんですけど、混在出来る日本っていうのが、私は希望的に見れるなぁと思っていて。一方で分化しちゃって、ここは俺の領域だから入れないっていうみたいなことで併存している点についてはやっぱり危険性があるなと思うんですね。でも混在できるっていうところの可能性を感じてて、なのでそれをポジティブに捉えて、その中で反省する部分は反省して、ここはわからないということとか、こういう風になっているっていうのは注目していきたいなと思っています。

書道も言ったようにそんな感じで、伝統系

の書道の方たちは全然知らないんですが、守りに入ってて僕の領域はあげないというのもすごくあると思うんですね。その方々からすれば私なんかは排除したい人になってると思うんですけど、私はつながっていきたいなと思います。書道は芸術じゃないっていう人も多いし、書道家からはお前は書道家じゃないと言われてマイノリティな感じで生きてるんですが、私は発言をそういう風に受け止めさせていただきました。

伊藤：ではそろそろなんですが、さっきのシンポジウムでの円卓会議のように、話し合いは大切ということでまとまったと思います。10 時までなので、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。

---

[1] 参加者の所属・肩書は、全て当時のものとする。
[2] 別府市在住の男性、自営業。
[3] 神戸大学大学院国際文化学研究科 教授。
[4] 立命館アジア太平洋大学国際経営学部 3 年生。立命館アジア太平洋大学は別府にある大学。
[5] 立命館アジア太平洋大学の略称。
[6] 神戸大学国際文化学部 卒業生。
[7] 神戸大学国際文化学部 4 年生。
[8] 神戸大学国際文化学部 4 年生。
[9] 九州大学大学院芸術工学府 修士課程。
[10] 神戸大学大学院国際文化学研究科 博士前期課程。
[11] 富山大学文化政策学部 4 年生。
[12] 九州大学大学院統合新領域学府ユーザー感性学専攻 修士課程。

文字起こし担当：富澤　美緒
編集担当：　　橋本みなみ